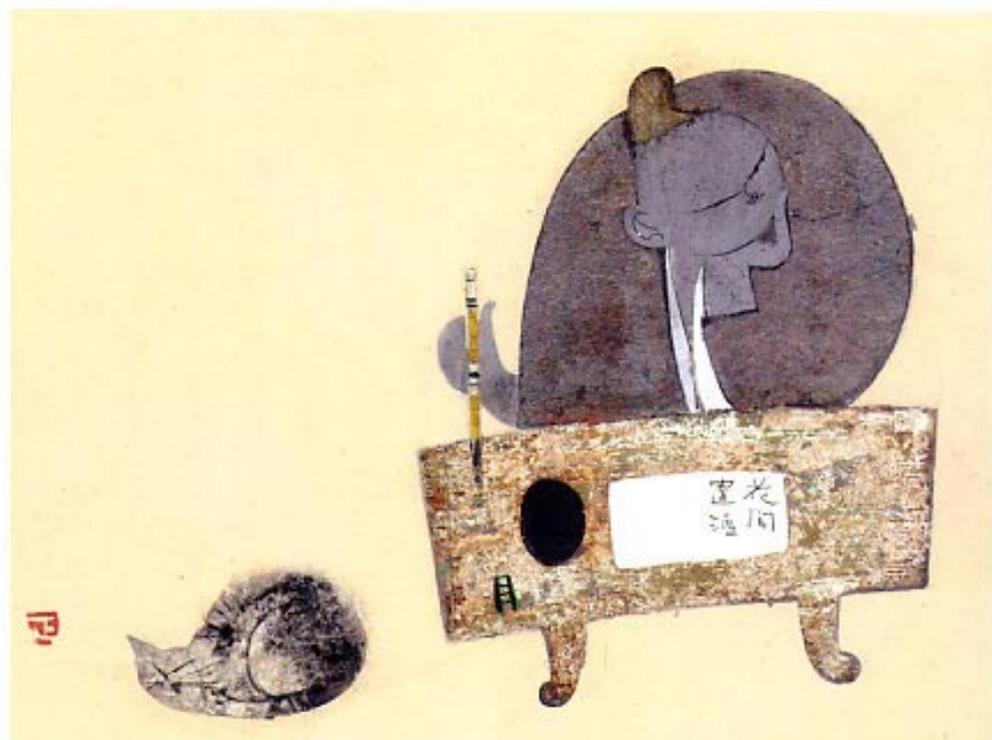


火星



平成20年2月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

船宿の前を走りし夕しぐれ

水引の屑手で寄する雪もよひ

杉山の闇そこにある年湯かな

鶴鴿に元日の畝ありにけり

赤ん坊を抱き合ひ御慶申しけり

枯山へつづく日向の手毬唄

檜葉垣の雨しづくする三日かな

山茶花をくる祝ぎ声でありにけり

雪ぬれの初旅の荷を寄せ合へり

山眠る車窓のポケットトウキスキ―

桐の一葉

飯塚 系子

宵闇の畳廊下を来る袴
台風のそれし砂丘をゆく帽子
網あみうど人に桐の一葉の流れきし
うかららのけふ川の字に夜のちちろ
秋蝶の象川越ゆる白さかな
十字架を畳に置きし良夜かな
秋の蜘蛛白壁斜に這ひにけり
除草機の音近づきし月見草
母の字の封筒ひらく秋の昼

特別作品

鶏鳴のときたまありぬ蕪襖
妹の手のひら温し金木犀
翅音のする梢あり菊花展
木守柿昏れ残りたる本籍地
僧林の釣瓶落しの築地塀
遠山に日の残りをり冬用意

砂浜に流れついた大な流木につかまり、Tシャツに半ズボンという出で立ちでバ
夕足で沖へ漕ぎ出す。ほどよいところで流木に身をまかせ漂う。自分だけのささや
かな健康法と思つて、夏がくるのを楽しみにしているのだが、小鯛の大群に囲まれ
てしまったことがある。群れが去る数分の間、息も出来ない恐怖を感じた。小鯛と
言え何万匹もの塊になると、人間も気絶させられる程の力があることを思いしらさ
れた。

太白星

柳生千枝子

茶の花に曾孫生まるるてふ報せ
年つまる暁け美しき雲のいろ
曾祖母となる晩年の初日浴び
冬帽子赤を選びて今日始まる
暁雲の紅うすれつつ来る寒さ
紅葉日々衰ふ紅を惜しみをり
冬の雲流る年逝くこと見えて

杉浦典子

ゆつくりと背骨ぬくもる石路の花
茶の咲いて日にち葉のひと日なる

由布岳を雲の覆へり人參畑
茎桶の空のひとつに日の差せる
跳ね橋の跳ね垂直に日の短か
写経紙の吹かるる障子閉めにけり
裏や母の日記をひろひ読み

浜口高子

冬仕度空の碧さを言ひにけり
水槽にすつぽんの貌日短か
綿虫や碁会所誰もなくなる
湿地茸つむりに赤い松葉のせ
短日の鯨口開いて焼かれをり
襖絵の右とずれぬる松の幹
腰屏風の裏側風の通ふなり

火星作品

山尾玉藻選

日短か父が鯉節けづる音
水音に引き返しけり茸山
砂時計見つめゐて風邪引きにけり
梟や夫のこころに母のゐる
神農祭はじまるまでの懐手
音たてて冬日をよぎる山の鳥
嫁取りの近きと父が松手入
北山より雨駈けてきし大根畑
龍の玉八十歳が勝手に来
花八つ手この世旅立つとき一人
桑畑へいくたび父の冬用意
振り向けばのつと山ある秋の暮
初冬の乗換へ線の蕎麦湯かな

大和郡山 城 孝子
豊中 廣畑忠明
明石 戸栗末廣

田仕舞の煙の過ぐるかぶすかな
啄木鳥の餌となりし冬田打
尼寺の飯炊くにほひ寒椿
絵の鬼の呵々と酒飲む冬霞
血の付きし鼬の口がふり向きぬ
残照の比良の紺碧寒波くる
いつしんに馬磨く腕枯る中
うす煙胸にかき寄せ牡丹焚く
父予後の箇条書なる日記果つ
菟倉の枯のほひをのぞきけり
冬帽のひさしの内の水の照り
枯芝をよぎる鳥影濃かりけり
昼の湯に母の目つむる冬隣
霜の晴石灯籠をせり落す
神在りの空や風力発電機
今出川の交番灯る落葉かな
花枇杷や緒方洪庵子だくさん

八幡
大山
文子

山本
耀子

宝塚
山田美恵子

選のあとに

山尾 玉藻

砂時計見つめぬて風邪引きにけり 城 孝子

「砂時計」を見続けていたことと風邪を引いたことに、実際の因果関係はなく、理由を断つていながら読者を納得させる力がある。二物が偶然から生まれた必然性で関り合っていると感じさせ、なるほどと共鳴させる。また、へ臯や夫のころに母のゝるの季語「臯」は絶対で、作者の微妙な精神風景を巧みに浮き上がらせている佳作である。

龍の玉八十歳が勝手に来 廣畑 忠明

人は否応なしに齢を重ねなければならず、八十歳ともなれば周囲から老齡として扱われるのが普通であろう。しかし、本人のこのころの内にこの現実に対抗するものが無い筈はない。一見悠揚とした表現の「八十歳が勝手に来」ではあるが、複雑な心情が籠められているのが読み取れる。それはこの心情が、密やかに艶やかに実を結ぶ「龍の玉」の本意に深く叶っているからである。巧まらずして深い思いを綴っている。

振り向けばのつと山ある秋の暮 戸栗 末廣

何気なく振り向いた作者の眼に、山容が思いがけない近さに存在していたのである。「のつと」は作者の驚きを直截に

表わした表現であろう。しかし、この「のつと」が一句の核となつて、「秋の暮」の実体を実感させる。

血の付きし鼬の口がふり向きぬ 山田美恵子

鼬は素早く駆けぬけた後、必ず振り返つてこちらを確認するが、眼がつぶらな所為でその仕草は結構可愛らしく映る。作者も恐らく、鼬に対して同じようなイメージを持つていたのだらう。しかし本来、鼬は鼠や鶏を襲う食肉類の生き物である。振り返つた鼬の口に血が付いているのを見て、作者は今更にして真の鼬の姿を知らされたのである。「口がふり向きぬ」の際立つた表現に、作者の驚愕ふりが窺える。

うす煙胸にかき寄せ牡丹焚く 山本 耀子

牡丹は花の盛りが豪華絢爛であるだけに、自ずとその枯ざまは憐れみを誘う。ましてそれを焚くとその思いは一人となる。「うす煙胸にかき寄せ」は煙を胸元にかき寄せている景ではない。噓せぬように煙を両手で払っているのだらうが、牡丹への憐憫の情がそう思わせるのである。「牡丹焚く」の趣向を、視覚から訴えて成功している。

花枇杷や緒方洪庵子だくさん 大山 文子

昔は「子だくさん」は一般的で、それだけでは決して詩として成立しない。しかし、江戸時代に蘭学を学び、医業を開き、適塾を設立した、優れた蘭医であった緒方洪庵だけに、逆に人間的な温かさや嬉しさを覚える。穏やかでゆかしい「枇杷の花」との取り合わせも的確である。(以下略)

恒星圈

大東由美子

冬鷺の風を抱きし着地かな
末枯の風の中なる目鼻立ち
散り紅葉朝の光の中にあり
赤組の部屋の冷たき冬休み
冬日差すわが指の影太くあり

坂口夫佐子

高尾豊子

台柿の一枝置かるミュージアム
腕組みの本家のあるじ柚子たわわ
柚子の実の暮れ残りたる坂途中
切り干しのちぢみ具合を日にすかす
呼びだしておいて待たせる蔦紅葉

歳晩や妙好人に会ひにゆく
山茶花の日向の色を手折りけり
年用意言はねばならぬこともあり
冬桜鳥居の横をすり抜けて
叩き売りの男に指さる小春かな

城孝子

高松由利子

提げゆける鯛と赤飯山眠る
神農の虎に道訪ふ冬もみぢ
冬の日の濃き神農の虎の口
をさな子の袴の折目みそさざい
水を見て熊肉食うて来しと言ふ

玉子百割つて鯛焼準備中
護送車に紅葉且散る風のあり
椅子席に杖もたせあり敷松葉
ゆりかもめ日に裏返るとき高し
凧や遠く見てゐる埴輪の目

獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

宇治十帖昔の色のシヨールして
酒蔵の梁のたてよこ冬の鴝
大吟醸酒下仁田葱も食べ頃ぞ
落し湯の音の失せたり冬銀河

白数康弘

水音や紙漉村に雪の来る
しんしんと葉缶の滾るる紙漉場
耐ゆるとは無言なること紙を漉く
暮れがたの煮物の匂ひ紙漉場

藤原冬人

着ぶかれて大和の畦の風の中
初雪や背広の時計かざし見る
納豆汁つとに明るき擦りガラス
毛糸編む妻の右手の痩せぬたり

助口弘子

井戸端の荃石濡るる母の留守
ふたりして水榭落葉踏む日かな
神農の虎に臍ある時雨かな
大寺に近くまほらの月夜茸

高橋芳子

霜晴やハイタツチしてすれ違ふ
男ぶりの虎選びけり神農祭
凧一号乳房のごときモダン焼
ビルへ張る神農祭の深庇

竹内水穂

作務僧の総出の銀杏落葉搔き
綿虫や太閤行列ありし道
秋晴や干されし魚の目のくぼみ
夙川は川の上の駅廬もみぢ

垣岡暎子

虫の夜の赤湯に漬かる湯搔棒
不揃ひをいうて橙くれにけり
天皇の抱きし琵琶なり雁渡る
夕鹿の鼻よせてくる二月堂